

## 「子どもたちの幸せを願って」

あおき まりこ  
青木 真理子

●全日本自治団体労働組合・総合企画総務局長

劇団「あけぼの」ミュージカル日本公演が、5月に東京、千葉、埼玉、名古屋、大阪、京都で行われ、出演する子どもたち6人と関係者が自治労を訪問した。

このミュージカルは、女性の自立のためのネットワークDAWNが主催し、日本とフィリピンで上演している。DAWNは日本で働くフィリピン女性などの移民労働者問題や日本からの帰国者の課題解決に取り組むフィリピンのNGOであり、自治労もDAWNの活動支援を行っている。

DAWNは、フィリピン人労働者の人権と生活を守り向上させることだけでなく、日本人の父親に認知されないJFC（Japanese-Filipino Children）が家族やフィリピン社会に復帰できるようにサポートすることも大きな目的として活動している。長年にわたり演劇を通して、日本とフィリピンの子どもたちが抱えるさまざまな問題を訴えてきた。

今回の演目は、日系フィリピン人であるミチコ・ヤマモトさんの作品である『クレイン・ドッグ～ルーツを探して～』。JFCの葛藤と人生を描いた物語である。

「物語は1匹の雌犬と鶴の運命的な出会いから始まり、お互いに恋に落ちる。しかし鶴が雌犬を置いて自分の地へと帰らなければならない時が来る。別れの後、雌犬は鶴との間にできたクレイン・ドッグを出産する。クレイン・ドッグは成長するにしたがって、その容姿のために他の犬からいじめられるようになる。母親を問い詰め、父親が鶴であることを知り、自分自身

のアイデンティティについて深く悩み始める。

ある日、クレイン・ドッグは本当の父親を探しに行こうと決心し、長旅の後、鶴の地に到着する。ついに鶴の父親に出会うが、父親にはすでに別の家族がいた。それでも鶴の父親と犬の母親を愛していることを伝え、自分の存在を父親に受け入れてもらうことができた。鶴の父親はクレイン・ドッグに飛び方を教え、しだいに他の鶴や犬たちから認められる」というストーリーである。

この物語と出演する6人の子どもたちの境遇は大きく重なっている。父親探しの旅にでて、この日本にやってきたのだ。「どんな障害があろうと、クレイン・ドッグのように父親に会いたい」と子どもたちは思っている。日本の印象を聞くと「街がとてもきれい」「電車にカードで乗っていてびっくりした」と話し、好きな食べ物はラーメン、ハンバーグとはにかみながら教えてくれた。

子どもたちはお父さんとのコミュニケーションがはかれるように、日本語を学んでいる。「昨日おばあちゃんの家泊まった」と笑顔で報告してくれた子。「お父さんと初めて電話で話すんだ」とドキドキしている子。「ぼくは医者になる。だから学費をお願いするつもり」と話した子もいた。

最後に日本語で歌をプレゼントしてくれた。曲名はKiroroの『未来へ』。歌詞と6人の子どもたちの今を重ねながら、子どもたちの未来が幸せであることを願わずにはいられなかった。